

この魔法薬師に発散を

ユキシア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

交通事故によって命を落とした藤原薬智は女神アクアから特殊な能力を授かり、異世界に転生する。そして異世界で出会った魔道具店のウイズの店で働いているのだが、ウイズのせいで赤字が続く毎日でストレスやら性欲やらが溜まっていく。

0
1

目次

1

駆け出し冒険者の街、アクセル。

その街にある小さな店、マジックアイテムを扱っているウイズ魔道具店の店主は。

「この、ダメ店主があああああああああああああつっ!!」

「ご、ごめんなさいー……ー……ー……ー!! でも、でも! これは売れると思って………ツ!!」

「何をどう考えたらこんなガラクタが売れるかと思ってんだああああああ!!」

店員に説教を受けていた。

その理由は全く売れない物を大量に仕入れたことにある。それでもこれが初犯であるのなら店員である藤原^{ふじわら}薬智^{やくち}もここまで怒らない。

覚えている範囲だけでもこれで十回以上はガラクタと呼んでもいい物を仕入れている。いくら薬智が注意していても少し目を離れた隙に勝手に仕入れるのだから怒髪冠を衝くのも無理はない。

「たくっ! 頭の栄養が全部そのデカイ胸に行ってるのか!? だからずっとこの店は赤字が続くんだよ!! 俺の給料も雀の涙程度になるんだよ!! 給料分そのデカパイを揉

ませろ!!」

「セ、セクハラですよ!! それに胸にばかり栄養は行っていないせん!!」
「だったら少しは売れる商品を仕入れやがれ!! このポンコツ店主!!」

これがいっつものウイズ魔道具店の日常。

そして、そのウイズ魔道具店で店員として働いているのは日本からこの世界に転生してきた日本人、藤原葉智は大きな、それはもう大きな溜息を吐いて怒りを宥める。

「ウイズ店主。俺達が出会って何年になるかわかりますか?」

「え、えっと、もう二年ほどでしょうか?」

「そうですね。道端で倒れているウイズ店主に食事を奢ったのがきっかけですよね」

「はい。あの時は本当に助かりました。一週間塩しか舐めていなかったのもう限界でしたので」

「そうですね。そして俺の職業は《魔法薬師》。俺が作った魔法薬をウイズ店主のお店に置き、住まわせてもらう代わりに売り上げの六割をウイズ店主に渡す契約をしましたね」

「はい。おかげで今はまともなご飯が食べられる生活が送れて……………」

「なら生活費は全部、俺が負担していることも当然知っていますよね?」

「……………」

硬直するウイズに薬智は笑顔のお面を貼り付けたまま追撃する。

「毎日の食事は勿論のこと。服や日用品、壊れた備品の修理費。その他諸々。契約通りの売り上げ四割の内、二割以上三割未満はそれで消えていることも当然知っていますよね？ まあ、俺にも必要なことですし、別に文句は言いませんよ？ ただ、ウイズ店主が全く売れない、むしろ、金の無駄遣いと言つていい物を仕入れなかつたら赤字から脱却していると思うのは俺だけでしょうかね？」

笑顔のままくどくどと告げる彼の言葉にウイズの顔も真つ青になる。

「ま、まめんなさい……………」

「謝るぐらいなら少しは学習していい商品を仕入れてこい!! ポンコツ店主!!」

「はー!!」

涙目で店の奥へ逃げ込む店主に薬智は大きく息を吐いて店を出る。

「この世界に来てもう二年か……………」

快晴の空を見上げながらそう呟く。

オタクである自分が交通事故に会つて女神によってこの世界に転生した薬智は女神から貰った能力を使って生活している。

薬智が女神から貰った能力は『あらゆる魔法薬を生成することができる能力』だ。

回復薬、筋力増加の魔法薬、硬化の魔法薬、魅了の魔法薬など、あらゆる魔法薬を生

成して生活している。

魔王討伐など始めからオタクである自分ができるとは思っていない。だから強力な装備や魔法ではなく異世界でも食べていける能力を選んだのだが……………。

「雇い主を間違えた……………」

額に手を当てて嘆く。

ウイズと出会った時、本人が魔道具店を務めていると聞いてチャンスだと思った。魔法薬をその店で売り、儲けようと考えた。美人巨乳店主と同じ屋根の下で生活できる下心がなかったわけではない。しかし、ここまで酷いとは思わなかった。

今では下心よりもどうやって売り上げを向上させて黒字にするかに悩まされている。

自分の店を開こうにも金がない為に今は少しでも売り上げをあげる為に冒険者ギルドへ訪れて掲示板を見る。

「そろそろジャイアントトードの繁殖期だし、これにするか」

掲示板に張られているジャイアントトード五匹討伐の依頼書を手にすると。

「ヤクチ。冒険者ギルドにいるとは珍しいな。また店が赤字なのか?」

「ああ、そうなんだよ。ダクネス」

頑丈そうな金属鎧に身を包んだ、金髪碧眼の美女。名はダクネス。

その職業は上級職の《クルセイダー》。固定のパーティーに入っていない女騎士であ

るダクネスにジャイアントトード討伐の手伝いを頼むことにする。

「ダクネス。できれば手伝ってくれないか？ 代わりにこの『モンスターに群がれる魔法薬』をやるから」

「ま、任せろ！ 喜んで手伝うぞ！」

息を荒くしながら差し出す報酬を受け取るダクネスの性癖はドMだ。それも引くぐらいの。しかし、高い防御力あるので壁役にはいい。

依頼を受けて街の外に広がる平原地帯でさっそく巨大カエルのジャイアントトードと遭遇するとダクネスは早速『モンスターに群がれる魔法薬』を頭から浴びた。

「さあ、ハッシー！」

興奮しきった顔で剣を構えるダクネスに周辺にいるジャイアントトードは一斉にダクネスに群がり始める。

本来、ジャイアントトードは金属を嫌うため、装備さえしつかりしていれば捕食されることはない。ただダクネスが浴びた魔法薬の影響でダクネスを中心に群がってダクネスはその巨体に挟まれ、のしかかられる。それなのにダクネスの表情はご満悦だ。

「ああ、悪くない！ 悪くないぞ！」

興奮しきった声でそんなことを叫ぶダクネスに薬智は自作のクロスボウを取り出して矢を番える。矢には小瓶が取り付けられていてそれをダクネスに群がるジャイアン

トトードに向けて放つ。すると爆発する。

矢に取り付けていたのは衝撃を与える爆発する魔法薬。その威力は爆裂魔法とまではいかないが、爆発魔法ぐらいの威力はある。

それをダクネスに群がるジャイアントトードに向けて放ったおかげで依頼達成。ジャイアントトードと共に爆発をその身に受けたダクネスはというと……………。

「い……………」

恍惚に満ちた笑みで地面に倒れていた。

「お疲れさん。もう終わったから帰るぞ。一応訊くが怪我はないよな？」

「ん？ ああ。この程度で怪我をするような鍛え方はしていない。むしろ、気持ちよかったぐらいだ」

「はいはい。変態のダクネスさん。帰りますよ」

「んっ！ その雑な扱いもまたいい！」

どのように扱ってもDMにとってはご褒美になる。ある意味都合のいい相手だ。

冒険者ギルドに戻って依頼達成の報告と報酬を受け取ってダクネスと少し話してから店に戻る道中で冒険者カードを確認する。

「お、新しいスキルが追加されてるな」

冒険者カードには新しく《薬物昇華》があった。文字通り薬物を昇華させるスキルだ

ろう。今後の為にそのスキルは取得しておく。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい。ヤクチさん！」

笑みを浮かべて出迎えてくれる店主。自分の帰りを待つてくれる優しい美人に薬智は嬉しくもあり、店主の後ろにある大量の箱を見て表情が固まる。

「私も反省しました。そこで新しい商品としてこの魔道具を仕入れてみたんです！
きつとこれは売れます！ 売れますよ！」

「……………その魔道具の効果は？」

「はい！ これは『カエル殺し』と呼ばれる魔道具でして、この魔道具の動きでジャイアントトードは簡単に食らいつくんです。すると封じられた炸裂魔法がカエルもろとも木っ端微塵になります！」

「……………その魔道具のお値段は？」

「二十万エリスです！」

ちなみにジャイアントトードの討伐報酬は一匹二万五千エリス。つまり、赤字だ。

「ふふ、ふふふふ……………」

「あの、ヤクチさん……………？」

不気味にも笑い出す薬智に冷汗を流しながら一步後退する店主に薬智は満面の作り

「むしろ頑張らないでください。そこにニコニコと座っているだけでいいので」

店主が働けば赤字になる。何もしないでいた方が助かる。

「はあ、もういいです。とにかくウイズ店主はそのゴミを今すぐ返品してください。しなかつたら」

「し、しなかつたら？」

「襲います。性的に」

「ひい！ わ、わかりました！」

「よろしい。その間に俺は明日売る魔法薬を生成します」

ウイズが仕入れを返品している間に、店の奥にある小さな作業場で魔法薬の生成に取り掛かる薬智はまた大きなため息を吐く。

「はあく発散したい」

ストレスも性欲もどちらも発散したい薬智は今日何度目になるかわからない溜息を溢す。

「またサキュバスの店に行くか」

最近頻繁に行っているサキュバスが経営している店でまた発散しようと考えながら魔法薬を生成する。